第 220 回「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

『器量の持ち主』 ～ 『性質の異なった者を 容れるだけの雅量』 ～

2023 年 12 月 9 日 早稲田大学エクステンションセンター中野校での講座【ジャンル 人間の探求：がんと生きる哲学 医師との対話を通して『がん』と生きる方法を考える】に赴く。｛【講義概要】：『がん哲学』とは、生きることの根源的な意味を考えようとする患者と、がんの発生と成長に哲学的な意味を見出そうとする医師との対話から生まれました。 授業では教科書の読みあわせと解説をしつつ、受講者とのディスカッションを中心に講義をすすめます。【テキスト】：『もしも突然、がんを告知されたとしたら。』（東洋新聞社）である。｝と謳われている。 今回は 6 回目で、テキストの『病気になっても、病人になってはいけない』からである。 音読しながら受講者との質疑応答のスタイルで進行する。

夕方は、日華斎場での故大弥佳寿子様(享年 60 歳)葬儀通夜に wife と参列する。 ご主人大弥雅昭氏から【― それまでは意識もしっかりとしていましたし、自宅で私が介護しながら普通の生活をしていました。 先生やガン哲学の仲間に感謝状を送ると前日まで下書きを書いていましたが、それは成就できませんでした。 また、先生から推奨されていました私の風景写真のアルバム出版も私の方で制作が完了して あとは佳寿子が各写真にメッセージを入れることで完結するはずでしたがそれもできず無念であったと思います。― 生前はガン哲学外来カフェばかりの話題でした。 先生にはお世話になりました。】のメールを頂いた。涙無くして語れない。

大弥佳寿子様は、『器量の持ち主』であった。『器量』といえば、『挑太郎』を 思い出す。鬼ケ島遠征の物語は、子供時代、村のお寺の紙芝居で よく聞かされたものである。 『挑太郎』が『犬・雉・猿』という性質の違った（世にいう犬猿の仲）伴を まとめあげたことを挙げた。 世に処する人は『性質の異なった者を 容れるだけの雅量』を もたなければならないと 新渡戸稲造（1862-1933）は『世渡りの道』（1912 年）は述べている。 大弥佳寿子様は、まさに、【『無邪気に、喜んで、小さなことに、大きな愛を込める』&『役割意識と使命感』】の実践者であった。大弥佳寿子様と『天国でがん哲学外来・カフェ』を開催したいものである。